

保育士養成校における実践的ピアノ指導についての一考察

丸山 京子

A Study of Piano Instruction in Preschool Education Training

Kyoko Maruyama

Summary

Instructors teach students to enhance their practical piano performance power. It emphasizes, concretely, the rich power of expression in performance. The student has one year of intensive piano lessons to attain this goal.

However, during practice teaching, various musical activities besides piano performance are required. There are also musical activities using hands or the body during practice teaching. This is considered to be one effective methods in raising infantile music sensitivity.

Received Oct. 30. 2004

Key words:piano practical skills, rythmique, music expression

1. はじめに

保育士を目指す学生にとって、音楽に関する授業科目は非常に重要である。なかでもピアノ演奏技術の向上は音楽表現としての重要な要素となっている。それは、卒業後保育士として就職し直ちに教育現場に立つ場合、音楽が子どもたちとコミュニケーションをとる重要な役割を果たすからである。今までピアノの音を聴いて表現をするという生活環境が少なかった子どもにとって、それは新鮮な驚きを感じとると思われる。さて、その際、保育士が子どもを見ながらピアノを演奏し表現する場合と、そうでない場を考えてみよう。子どもの眼は前者のピアノ演奏し表現する方がより輝きを増し、気持ちが豊かになるのではないだろうか。さらに音を聴いて子どもがからだを動かすようになり、音楽に対する楽しさを感じとるようになる事も考えられる。このような表現が出来る保育士をめざすために、本学幼児教育学科のピアノ指導が展開されている。

ここでは若干拙稿を振り返りながら、平成15年度入学生に対するアンケートをもとにして、より実践に近いピアノ指導とその基礎となる音楽活動と音楽表現について考えてみたい。また、さらに進んでピアノ演奏以外の音楽（リズム表現）を使った幼児に対する指導についても考察

を進めていきたい。

2. 調査の方法

調査対象学生（平成15年度入学生）

教育実習Ⅰ…124名

保育実習……120名

教育実習Ⅱ…111名

調査日時（平成15年度入学生）

教育実習Ⅰ…平成15年11月

保育実習……平成16年4月

教育実習Ⅱ…平成16年6月

3. 結果・考察

1. 学生のピアノ演奏技術の向上

表1は本学音楽研究室で独自の制度を作り、行われているピアノグレードの取得結果である。グレード制度は1年次に2回（前期・後期）、2年次に1回（前期）学生一人ずつに行っているピアノ演奏力レベルを確認するものである。この制度は保育者として求められているピアノ演奏力の基礎技術を身に付けてもらうために設けられた。

表1 グレード取得別学生数

	平成15年4月		平成16年1月	
	実数	%	実数	%
G1	14	11.7	0	0.0
G2	17	14.2	10	8.3
G3	12	10.0	18	15.0
G4	47	39.2	18	15.0
G5	13	10.8	31	25.8
G6	15	12.5	27	22.5
G7	1	0.8	12	10.0
G8	1	0.8	3	2.5
G9	0	0.0	1	0.8
G10	0	0.0	0	0.0
計	120	100.0	120	100.0

その内容はグレードを0から9までに分類し最終的にグレード4レベルに達することを目標にしている。ちなみにグレード0から2までが初心者レベル、グレード3から4までがバイエル経験者レベル、グレード5から6が初級者レベル、グレード7から8までが中級者レベル、グレード9から10までが上級者レベルである（丸山京子他「グレード制度をとり入れたピアノ

指導の一考察』『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第35集、2003年3月、4～5ページ)。

表1によれば平成15年度入学生は全体の35.9%が入学時(平成15年4月)にグレード1から3までに位置していた。その他グレード4が39.2%、グレード5が10.8%、グレード6が12.5%などとなっている。ほぼ1年後の平成16年1月の認定結果を見ると全体的にグレードがワンランク上がっている。すなわちグレード1が0%であり、グレード2と3レベルが合わせて23.3%となっている。前回と比べるとグレード1から3までのレベルにいる学生が12.6ポイント減少している。これに代わってグレード5および6レベルの学生が大幅に増加し、約半数の48.3%である。グレード4以上あるレベルの学生は平成15年4月に64.1%であったのが、平成16年1月には76.6%に増加している。グレード認定が成績の一部に反映されていることもあろうが、学生の日々の努力がこのような結果となって現れていると思われる。

2. 実習に向けたピアノの練習

平成14年度の教育課程変更に伴う実習単位の増加により、最初の実習が1年次の11月に行われる(教育実習Ⅰ)こととなった。これは学生にとって実習までの準備期間が平成13年度以前の学生に比べて短くなることである。一方、指導者にとっては短期間である程度のピアノ演奏力を身に付けさせ、実習に送り出さなければならない状況になる。つまり、指導者にとっては学生のピアノ演奏力に対する向上意欲を意識付け、より効率的な指導をすることが要求される。このことから後に述べるように、昨年度より希望者に限り夏期休暇中にピアノレッスンを行っている。その結果、夏期休暇中にレッスンを受けた学生のグレードアップが確認された(拙稿「教育課程変更にもなうピアノ指導についての一考察」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第36集、2004年3月、143ページ)。

さて、短期間で集中的な指導を受けた学生は11月に初めての実習を迎えることとなる。学生は実習に向けてどのくらいピアノ練習をしているのであろうか。表2および表3は実習前のピアノ練習日と一回あたりの練習時間を質問した結果である。教育実習Ⅰに向けて全体の41.1%の学生が週3日ピアノを練習している。同じく、保育実習前には35.8%、教育実習Ⅱの前には36.0%の学生が練習をしている。週3日ピアノを練習している学生の数値は徐々に低下している傾向にあるが、これに代わって週4日および週5日練習している学生の比率が上昇している。週4日練習している学生は19.4%(教育実習Ⅰ)、19.2%(保育実習)、28.8%(教育実習Ⅱ)となっている。また、週5日練習している学生は9.7%(教育実習Ⅰ)、10.0%(保育実習)、15.3%(教育実習Ⅱ)である。さて、一回あたりの練習時間はどれほどであろうか。最も多い時間は30分から1時間未満で61.3%(教育実習Ⅰ)、53.3%(保育実習)、58.6%(教育実習Ⅱ)である。その他の一回あたりの練習時間にはさほど変化は見られない。

練習日は全体として多くなっているが、一回あたりの練習時間は減少している傾向が見られる。これは何を意味しているのであろうか。最初の実習は1年次の11月に行われている。短大

表2 実習前のピアノ練習日

	教育実習Ⅰ		保育実習		教育実習Ⅱ	
	実数	%	実数	%	実数	%
2日以下	31	25.0	37	30.8	17	15.3
3日	51	41.1	43	35.8	40	36.0
4日	24	19.4	23	19.2	32	28.8
5日	12	9.7	12	10.0	17	15.3
毎日	6	4.8	5	4.2	5	4.5
計	124	100.0	120	100.0	111	100.0

表3 ピアノ練習時間

	教育実習Ⅰ		保育実習		教育実習Ⅱ	
	実数	%	実数	%	実数	%
30分以下	20	16.1	24	20.0	18	16.2
30分以上	76	61.3	64	53.3	65	58.6
1時間以上	27	21.8	29	24.2	24	21.6
2時間以上	1	0.8	4	3.3	3	2.7
3時間以上	0	0.0	0	0.0	0	0.0
計	124	100.0	120	100.0	111	100.0

部入学後半年ほどで実習に向かうことから学生の実習に対する意気込みが、ピアノ練習量に現れていると思われる。同じく2回目の実習となる保育実習に対しても同様のことが言えよう。教育実習Ⅱはそれまでの実習の経験を生かした、より実践的なピアノ練習が行われていると思われる。すなわち、子どもとのふれあいを経験した学生が音楽を使った、より工夫されたピアノ表現を心がけていると思われる。また、教育実習Ⅱではピアノを中心として子どもと接することがそれまでの実習と比べて相対的に減少し、ピアノだけに集中した実習前の勉強ができなくなっていることを示していると思われる。また、学生は実践的なピアノ練習をし始めてから1年以上経過し、ある程度ピアノ演奏力が備わってきたともいえる。

さて、音楽研究室では平成15年度から希望者に限って夏期休暇中にピアノレッスンを行っている。これは音楽研究室の指導目的である1年間でバイエル教則本（グレード4以下）を終了することに基づいている。また同時に、グレード5以上の学生に対してはピアノ演奏の基礎能力と表現力を備えた保育者になるための意識付けが含まれている。

表4は夏期休暇中のレッスンを取り入れていなかった学生（平成14年度入学生）と、レッス

表4 入学年度別グレード認定結果 (%)

	平成14年度入学生		平成15年度入学生	
	前期認定	後期認定	前期認定	後期認定
G1～4	82.6	57.5	76.8	36.2
G5～9	17.5	42.4	23.2	63.7

保育士養成校における実践的ピアノ指導についての一考察

ンを取り入れた平成15年度入学生のグレード認定比率をまとめたものである。グレード1～4までの認定学生は平成14年度入学生では前期認定時点で82.6%である。これが後期認定時点では57.5%に減少している。グレード5以上では17.5%（前期認定）から42.4%（後期認定）に増加している。平成15年度生を見るとグレード1～4までの学生の比率は前期認定が76.8%、後期認定が36.2%である。同様にグレード5以上の認定学生は前期時点で23.2%であったのが、後期時点の比率が63.7%と大幅な増加を示している。

グレード5以上の認定を受けた学生の比率は42.4%（平成14年度入学生）から63.7%（平成15年度入学生）へと20%ほど増加している。また、夏期休暇中のピアノレッスンを受けた学生のうち113名がグレードアップしており（拙稿「教育課程変更にとまなうピアノ指導の一考察」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第36集、2004年3月、143～144ページ）。一年間だけの比較数値ではあるが、ピアノ練習を習慣化する事によるよりよい効果が表れているものと思われる。その結果指導者はピアノ演奏に余裕の出た学生について工夫した演奏方法を身につけさせ、子どもと接し更なる音楽表現を身に付けさせなければならない。

3. 実習中のピアノ演奏

表5は実習中にピアノを弾く機会がどれほどあったかを質問した結果である。ピアノを弾くことがあったのは教育実習Ⅰでは44.0%、保育実習では43.7%、教育実習Ⅱでは55.5%である（数値は全体から「ピアノを弾く機会がない」と言う数値を差し引いたものである）。

表5 ピアノを弾く機会

	教育実習Ⅰ		保育実習		教育実習Ⅱ	
	実数	%	実数	%	実数	%
毎日	7	6.0	1	0.8	9	8.2
2日に1回	5	4.3	7	5.9	13	11.8
3日に1回	14	12.1	6	5.0	14	12.7
週1回	25	21.6	38	31.9	25	22.7
無し	65	56.0	37	56.3	49	44.5
計	116	100.0	119	100.0	110	100.0

教育実習Ⅰ、保育実習では半数以下の学生がピアノを弾いている。その頻度は週一度弾いた割合が最も高く、それぞれ21.6%、31.9%である。教育実習Ⅰは見学・観察実習が中心であり、ピアノを弾く機会が少なくなっているものと思われる。

さて、これに比べて教育実習Ⅱでは半数以上の学生がピアノ演奏をしている。とくに、2日に一回、3日に一回ピアノを弾いた学生で比率が高くなっており、それぞれ11.8%、12.7%である。保育実習に比べると比率が倍増している。各幼稚園によってさまざまな教育方針があり一概には言えないが、学生は参加実習に入る段階であり、ピアノを使った保育活動に携わったものと思われる。

それでは実際に学生はどのようなピアノ演奏ができたと思っているのであろうか。表6は複数回答項目であり学生のピアノ演奏力の自己分析とも言える。回答項目は下段に行くほどより高度な演奏力となっている。

表6 どのようなピアノ演奏ができたか?

	教育実習Ⅰ		保育実習		教育実習Ⅱ	
	実数	%	実数	%	実数	%
ピアノ演奏だけ	15	25.0	9	16.7	5	6.3
弾き歌いができた	22	36.6	22	40.1	21	26.6
見ながら演奏ができた	8	13.3	10	18.5	14	17.7
見ながら弾き歌いができた	15	25.0	13	24.1	39	49.4
計	60	100.0	54	100.0	79	100.0

教育実習Ⅰでは「ピアノ演奏だけができた」という学生が25.0%、「弾き歌いができた」学生が36.6%ある。これに対して「子どもを見ながらピアノ演奏ができた」という学生が13.3%、「子どもを見ながらの弾き歌いができた」学生が25.0%である。保育実習になると「ピアノ演奏だけができた」学生の比率が教育実習Ⅰに比べて10ポイントほど減少し、「弾き歌いができた」学生の比率が4ポイントほど上昇している。また「子どもを見ながらピアノ演奏ができた」比率が同じく5ポイントほど上昇している。「子どもを見ながらの弾き歌いができた」という比率は変わらない。教育実習Ⅱでは「ピアノ演奏だけができた」学生はわずか6.3%となっている。さらにまた、「弾き歌いができた」と回答した学生も26.6%とほぼ半減している。これに代わって「子どもを見ながらの弾き歌いができた」と回答した学生は49.4%と倍増している。

グレード制度の導入とともに、音楽研究室では「幼児歌曲の弾き歌い」の試験を授業の中で行っている。それは一年間で幼児歌曲を最低10曲弾き歌い出来る事を学生に義務付けている試験である。この成果が、倍増したひとつの要因と思われる。

ピアノ演奏力が備わるとピアノの弾き方に工夫が出てくる。その結果、余裕をもって子どもに合わせたピアノ演奏ができ、豊かな音楽表現も養われてくるとと思われる。

4. 実習における音楽活動

表7はピアノ演奏以外にどのような音楽活動があったかを聞いたものである。

表7 どのような音楽活動があったか（複数回答）

	教育実習Ⅰ		保育実習		教育実習Ⅱ	
	実数	%	実数	%	実数	%
手あそび	78	39.6	75	42.6	97	50.8
紙しばい時の歌	13	6.6	2	1.1	12	6.3
いっしょに歌う	81	41.1	74	42.0	82	42.9
その他	25	12.7	25	14.2	0	0.0
計	197	100.0	176	100.0	191	100.0

これによると教育実習Ⅰ・Ⅱ、保育実習ともに「手遊びをした」項目と「いっしょに歌う」という項目に対する回答が多い。とくに「手遊びをした」と回答した比率は実習を重ねるごとに大きくなり、教育実習Ⅱでは半数を超えるほどになっている。

実際の教育現場ではピアノ演奏ばかりではなく、いろいろな音楽活動を通して、子どもと触れ合っている。とくに、「手遊びなど」は特別な楽器を使わず自分の手を使った表現が行われている。手をたたく強弱、手の動きなどさまざまな場面が表現できる。子どもたちはこれらの音を聴いたり動きを見たりして、さまざまな刺激や感動を受けている。保育士のからだは楽器となって音楽活動を行っており、これも音楽表現の中で重要な要素と思われる。音楽が子どもの心の成長に役立つことはよく知られていることである。また、ピアノ演奏によって子どもと保育者との間に豊かな音楽的要素をも培われる。ピアノ演奏はもとより、より広い意味における音楽表現という視点から、楽しく音楽に触れ合う事を背景にして、幼児の成長に適した創造性豊かな音楽表現をピアノ指導の一環として取り入れる事も考えられる。

4. おわりに

平成15年度入学生が行った教育実習Ⅰ・Ⅱ、保育実習について実習が終わるごとにその都度アンケートを取り、ピアノ演奏力の上達が実習にどれほど役立っているかを検討してみた。学生は短大部卒業後直ちに教育現場に立つので、より実践に近いピアノ演奏力と音楽表現力を身につけて卒業することが求められる。先に述べたように、音楽研究室ではピアノ演奏技術や表現力を高めるためグレード制度を導入して、幼児歌曲の弾き歌いを義務付けている。本論で展開したように、これらの教育目標は少なからず達成されていると思われる。

教育現場ではピアノ演奏以外に音楽を利用したさまざまな保育活動が実践されている。学生にとってはピアノ演奏の上達だけに目を向けるのではなく、そのほかの音楽表現方法を身につける事も重要な課題であろう。音楽を用いた教育活動は即時反応、基礎リズム、音楽反応などいろいろな分野で利用・実践されている。指導者としてはこれらを応用した幅広い保育活動にも目を向け、より実践的な保育士を養成する教育を考える必要があると思われる。

参考文献

1. E. バンドゥレスバー著（石丸由理訳）『ダルクローズのリトミック』ドレミ楽譜出版社、2002年。
2. 全国大学音楽教育学会編『幼児音楽教育ハンドブック』音楽之友社、2001年。
3. R. J. ウィンジェル著（宮澤淳一他訳）『音楽の文章術』春秋社、2001年。